

杏林大学保健学部臨床検査技術学科

森田 耕司*

はじめに

本学の実質的な歴史は、1966年の学校法人杏林学園の設立から始まるが、そのルーツは東京三鷹新川総合病院(病院長 松田進勇, 学校法人杏林学園 初代理事長・学園長)である。

東京三鷹新川総合病院は1954年、東京都三鷹市新川854番地(現在は三鷹市新川6丁目20番2号)に開設され、その規模は、普通病棟172床、結核病棟49床、精神神経科病棟369床であった。そして1964年10月、病院の中に東京医学研究所(初代所長 野辺地慶三, 杏林短期大学 初代学科長)が設置され、この研究所が杏林学園短期大学

(保健学部の前身)開設の礎となった。学園創設者、松田博士の考えの中には、それ以前から、衛生検査技術(現在の臨床検査技術)教育関連の学校設置についての構想があったとのことである。

短期大学の設置にあたっては、東京三鷹新川総合病院中央検査部長と東京医学研究所化学部長を兼務していた勝目卓朗博士(短期大学教授・同学科長を経て保健学部 初代学部長)、同研究所細菌部長の志賀鑑時博士(短期大学教授を経て保健学部教授)など11人の先達(写真1)が大変な苦勞と周到な準備を重ねた。志賀博士は次のような記述を残している。

『昭和40年の10月5日に申請書が提出(当時の



写真1 11人の先達

* moritako@ks.kyorin-u.ac.jp

文部省、厚生省に)された訳ですが、事務的なことについては、11人で分担しました。もちろん分担された人だけではなく、病院、検査部の職員にも協力を頂きました。それはそれは大変なことでした。設置が認可された1月25日、いよいよ短期大学として旗揚げした訳ですが、まずは地元の高校への進学勧誘挨拶が行われました。2月20日に推薦入試が、その後には一般選抜が2回予定されているので不安は募る一方でしたが、定員を2倍も上回る応募があったので、関係者は安堵したものでした。このときの産みの苦しきは、その後の保健学部開設への原動力に繋がったと思います。』

そしてその年、1966年2月24日の朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の全国版には、杏林学園短期大学の募集広告が掲載され、4月には短期大学第1期生63名の入学式を迎えるに至った。

杏林学園短期大学衛生技術科で始まった2年制の衛生検査技師教育は、その後1973年に3年制の臨床検査技師教育へと変わり、1981年には第13期生が短期大学最後の卒業式を迎えることになった。この間に巣立った卒業生は1,678名、杏林学園短期大学は“発展的解消”の時を迎え、臨床検査技師教育の伝統は保健学部へとバトンタッチされた。また、教育の場は三鷹キャンパスから八王子キャンパスに移り、名実ともに新たな出発の時を迎えることになった(写真2,3)。

保健学部の開設はその2年前の1979年に溯るが、その前年には成田空港が開港し、その翌年

1980年はWHOが痘瘡(天然痘)の根絶を宣言した人類史上記念すべき年であった。

現在、本学部は6学科(4月から7学科)構成であるが、第1期生から昨年3月に卒業した第28期生までの卒業生数は4,881名(内・臨床検査技術学科2,036名)である。

I. 建学の精神

本学の建学の精神は「真・善・美の探究」である。

「真」とは、真実、真理。すなわち学問のことであり、大学における学問とは、自ら進んで大いに学び研究するということである。「善」とは、倫理観をもった良き人柄、人格を意味しており、他人に対する優しさと思いやりをもつ人柄に自分を作り上げるということである。「美」は、こうした「真」と「善」を実行し、自然を愛し、他人を尊重し、自らの身を辞するのに厳であれば、自然に美しい立派な風格をもった人間になるということである。

II. 学部の教育理念

本学部は、建学の精神「真・善・美の探究」にもとづいて、保健・医療・福祉の分野で、専門知識と技術を教授し、科学的な物の見方と思いやりを涵養して、将来広い視野から物事をとらえ、人々がより健康的に生きることをサポートできる人材を育成することを目的としている。



写真2 学部校舎エントランス(その1)



写真3 学部校舎エントランス(その2)

III. 臨床検査技術学科を取り巻く 教育環境

学部開設当初は、臨床検査技術学科と保健学科(現・健康福祉学科: 関連科目の履修により臨床検査技師国家試験の受験が可能であった)の2学科構成で教育を行っていたが、その後、看護学科、臨床工学科、救急救命学科、理学療法学科が開設され、本年4月には作業療法学科が開設される。

2学科構成の時代には、保健学科の学生も半数以上が臨床検査技師国家試験を目指していたことから、本学部の教育の根幹は臨床検査技師教育にあると言えた。しかし、新たに複数の学科を要し医療系の総合学部となった現在、これまでに培われた“臨床検査技師教育の伝統が希釈されてしまった”と感じることが多くなったことは事実である。

一方、複雑・多様化した学科構成は、“他学科科目の履修”や“合同授業”などを通じて、個々の専門性を深めるだけでなく、幅広く関連領域の学問を学び、広い視野と教養を磨ける教育環境であることも事実である。現在、本学部ではこのような利点を生かし、学科の枠を越えた教育体制を整備しつつあり、救急医学、食品衛生、衛生管理、社会福祉などに関連する教育を学科を越えた教員の連携によって実施している。また、本学には文系2学部(総合政策学部、外国語学部)が併設されており、“国際医療協力”に関連した教育を文系学部の教員との連携によって実施している。

IV. 病院を支える様々な業務・部署を知る 「総合医療演習 II」

本学科では、総合医療演習 I・II という演習科目を設置している。1年次に開講する総合医療演習 I では、9月と3月の学休期間に、臨床検査技師が活躍する職場として、本学付属病院臨床検査部、検査企業、国立感染症研究所、東京都健康安全研究センターなどを見学する。3年次に開講する総合医療演習 II では、学内実習が終了した後期の12月～3月の間に、本学付属病院の各部署の職員による業務関連の講義と各部署の見学研修を行っている。講義では、各部署と臨床検査技師

との関連、各部署が臨床検査技師に期待することなどにも触れていただき、看護部、高度救命救急センター、ICU、手術部、医療機材滅菌室、リハビリテーション室、放射線部、臨床工学室、腎・透析センター、薬剤部、栄養部、医療安全管理室、臨床試験管理室、医事課、診療情報室、臨床試験管理室、医療福祉相談室、SPD(院内物流関連委託管理部署)など、病院を支える様々な部署の職員に学部の講義では聞くことができない貴重な講義を行っていただいている。さらに、臨床検査技師が働く部署の臨床検査部、病院病理部の職員には、病院の機能を支える両部署の重要性について講義していただいている。“見学研修”では、小グループによる病棟、内視鏡室、臨床工学室、腎・透析センター、リハビリテーション室(理学療法、作業療法、言語療法)、放射線部、薬剤部の見学を、また、統合グループによる高度救命救急センター、ICU、手術部、医療機材滅菌室、栄養部、診療情報室の見学を行い、見学各部署で職員による丁寧な説明を実施していただいている。本演習は臨地実習と一味も二味も異なり、参加学生は病院の機能と病院を支える様々な職員の姿を目の当たりにすることによって、これから進む道への夢と希望を新たにすることになる。

おわりに

1988年に本学部開設10周年記念として刊行された“杏林大学保健学部十年誌”の中で勝目学部長(初代学部長)が綴った次の文章(序文の一部)は、本学部が進むべき方向を示したものとして、今でも著者の心の中に生き続けている。

以下原文。

『現代の様態の移り変わりはすざましいものである。具体的にいえば、1～2年前のカリキュラムが、そのまま卒業時までに通することも危惧されるようである。よほど、柔らかくないと学生すら対応できない面をも持っている。大学の使命は、真理の探究の面もあることを否定はしないが、良識ある職業人を作るところも肯定しなければならぬ。それは、あたかも教員が、研究と教育を両輪のごとく併せ持つようなものである。思えば、

現在ほど、教育し難い時代はあるまい。われわれは、学生を通して、魂を忘れ、ひたすら豊富な物質に没頭してゆく現日本、あるいは世界状況と対面しているわけである。ただ一つの方法、理念のみで処方できるとは思わない。あらゆる処方を考えなければなるまい。ただ、いかなる時代になる

うとも、根本にある真理、哲学理念は変わることがない。医にあつては仁、保健にあつては「あらゆる人に健康を」という悲願である。この大慈、大悲のもとに、つねに立ち戻り、ここからつねに出発すべきであろう。』